

7. 沖合底魚資源調査

1) 沖合底魚資源動向調査

倉長 亮二

目的

沖合底魚資源の持続的利用と沖合底びき網漁業の経営安定に資するため、山陰沖における有用資源の資源動向を把握する。

方法

鳥取県の沖合底びき網漁船が所属する地区（賀露，網代，田後）の漁獲月報を集計し，主要魚種の漁獲変動を把握した。

結果

本県沖合底引網の1975年以降の地区別漁獲量，金額を集計し，図1及び図2に示した。3地区合計の漁獲量は1977年の10,608 tを最高に減少し，1995年には4,682 tまで減少した。しかし，その後は微増傾向に転じ，2005年の漁獲量は6,776 tでピーク時の64%にまで回復した。これを地区別にみると，賀露の減少が最も顕著であり，網代は横這い，田後は近年増加傾向であった。一方，漁獲金額は統計を取り始めた1975年の合計金額は30.9億円と最も低い金額であったが，以後増加し，バブル景気時の1991年には59億円に達した。しかし，近年は減少傾向にあり，2005年は44.5億円でピーク時の75%となっている。これを地区別に見ると1996年までは3地区ともほぼ同様の傾向を示しているが，1997年以降，賀露，網代地区では漁獲金額が減少傾向を示すのに対し，田後地区は増加傾向を示しているのが特徴的である。

この漁獲量，金額の推移を地区別に主要魚種に注目してみたのが，図3である。賀露の漁獲量は1980

年代半ばまではアカガレイ，ニギス，ハタハタに支えられていたが，1980年代後半からは，アカガレイ，ニギスにかわり，ヒレグロが漁獲されている。そして，1990年以降，ヒレグロ，ハタハタが減少し，ソウハチとハタハタが漁獲の主体となり，近年ではソウハチも減少し，ハタハタの漁獲が大半を占めている。一方，漁獲金額では，1990年頃まではアカガレイ，ハタハタが主体であったが，1990年以降アカガレイ，ハタハタが減少し，ソウハチの占める割合が増加している。1990年後半以降はソウハチも減少し，漁獲金額の主体は松葉がにに移っている。

網代は1980年後半まではホッコクアカエビ（ホッコクアカエビは1984年まではその他エビに含まれていたが，1985年以降単独で計上されている）とアカガレイが漁獲量，金額の主体をなしていたが，1990年代以降両者の漁獲量が減少する代わりにハタハタの漁獲が増加し出した。そして，1990年代後半以降は親がにの漁獲量も増加し，金額ではアカガレイ，親がに，松葉がに，ハタハタが主体となっている。

田後は1970年代後半はハタハタ，ヒレグロ，ホッコクアカエビが漁獲の主体となっており，ヒレグロの急速な漁獲量の減少とともにアカガレイの漁獲量が増えているが，1980年後半からはエビ類，アカガレイとも減少し，1990年前半頃まではハタハタの漁獲が主体となっている。そして，1990年代後半以降はハタハタに加え，ソウハチの漁獲量が増加し，さらに2000年に入るとソウハチが減少し，代わりに親がにが増加しており，近年の漁獲の主体はハタハタ，親がに，ソウハチ，ヒレグロになっている。一方，

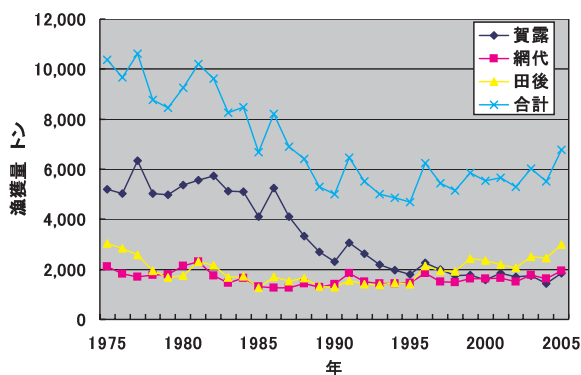


図1 地区別漁獲量の推移

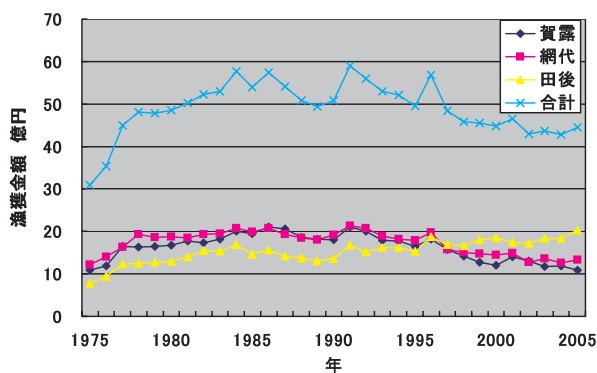


図2 地区別漁獲金額の推移

金額では、1980年代後半まではホッコクアカエビが漁獲金額の主体となっていたが、その後、ハタハタ、アカガレイが台頭し、1995年以降はアカガレイの減少に伴い、親がに、松葉がにの漁獲金額が上昇し、近年の漁獲金額の主体は松葉がにと親がにと

いる。

最後に2005年の地区別魚種別漁獲量、金額を図4に示した。賀露は減船等の影響で3地区の中で漁獲量、金額が最も低くなっている。漁獲量ではハタハタが最も多く、全体の43%を占めているが、漁獲金

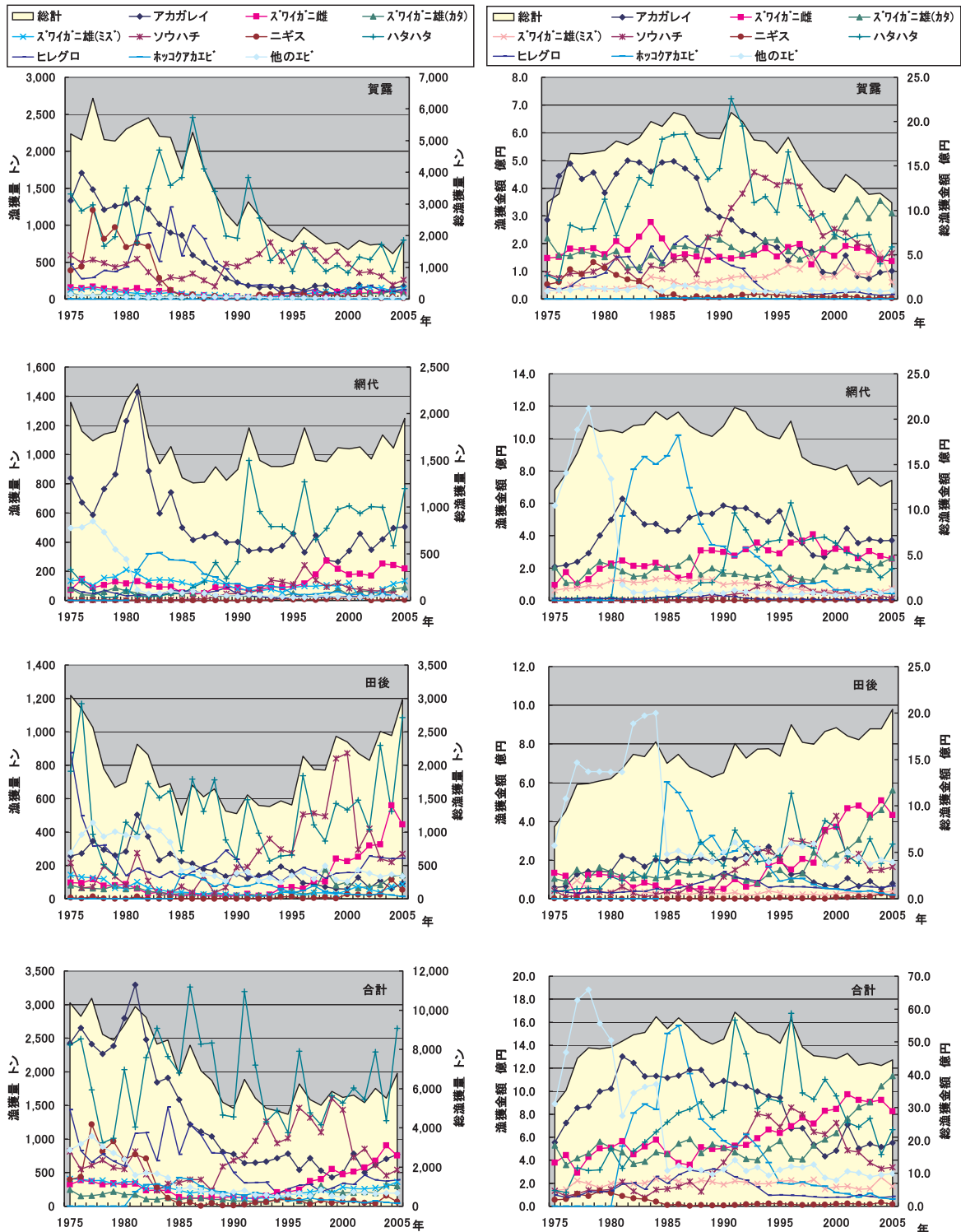


図3 地区別魚種別漁獲量、金額の推移

額ではズワイガニが最も多く、全体の48%となっている。網代は漁獲量、金額とも賀露に比べやや多くなっているが、ハタハタの占める割合は低く、漁獲金額でも、ズワイガニ、アカガレイ、ハタハタの順になっている。田後はアカガレイの漁獲量は少ないものの、ソウハチ、エビ類、ヒレグロ等を漁獲し、

賀露、網代の中間的な魚種組成を示しているが、漁獲金額ではズワイガニの占める割合が多く、3地区のなかで、唯一ズワイガニの漁獲金額が全体の5割を上回っている。3地区の合計漁獲量はハタハタの増加により6,776tとなり昨年より23%の増加、漁獲金額は44.5億円で昨年より、7%の増加であった。

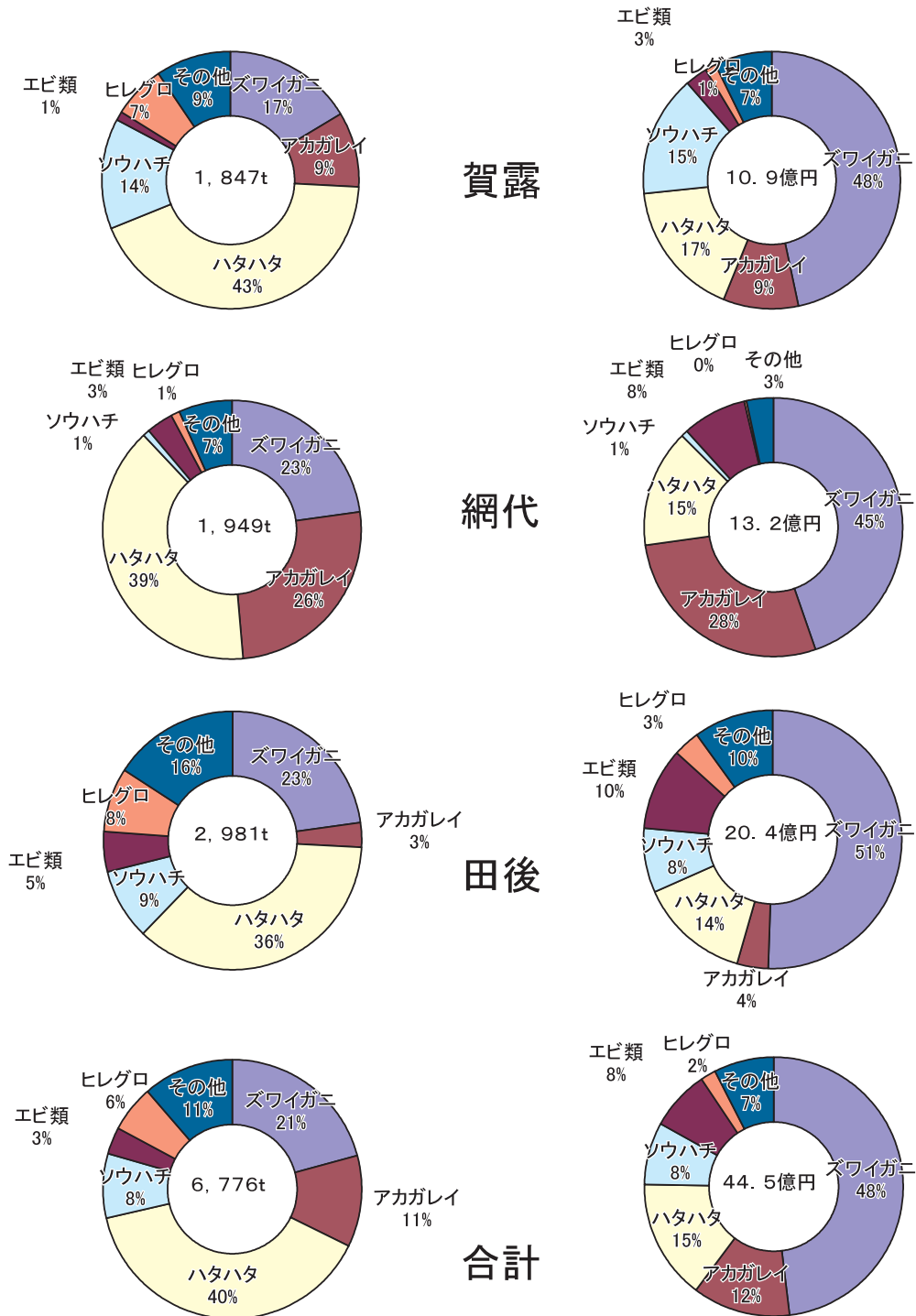


図4 地区別魚種別漁獲量，金額（2005年）